

A I ネットワーク社会推進会議
影響評価分科会
第3回 議事概要

1. 日時

平成29年2月20日（月）10:30～12:00

2. 場所

中央合同庁舎第2号館 7階 総務省 省議室

3. 出席者

(1) 構成員

城山分科会長、大屋分科会長代理、板垣構成員、板倉構成員、稲葉構成員、江間構成員、大田構成員、落合構成員、香月構成員、河井構成員、クロサカ構成員、近藤構成員、中西構成員、萩田構成員、林（秀）構成員、原構成員（代理：西野 株式会社富士通研究所知識情報処理研究所特任研究員）、村上構成員、山本構成員、横田構成員、渡辺構成員

(2) 総務省

鈴木総務審議官、谷脇情報通信国際戦略局長、武田大臣官房総括審議官、吉田情報通信国際戦略局参事官、元岡情報通信政策研究所長、福田情報通信政策研究所調査研究部長、成原情報通信政策研究所調査研究部主任研究官、市川情報通信政策研究所調査研究部主任研究官、尾川情報通信政策研究所調査研究部主任研究官

(3) オブザーバー

内閣府、情報通信研究機構、科学技術振興機構、理化学研究所、（一社）産業競争力懇談会

4. 議事概要

(1) 運営方針等

資料1の運営方針（改）の確認が行われ、事務局より、丸山構成員から構成員を辞する申出があった旨の報告があった。

(2) 事務局からの説明

事務局より、資料2及び資料3に基づき、先行的評価（ユースケースとシナリオ分析）及び分野別評価（分野の区分）について説明が行われた。

(3) 意見交換

【大屋分科会長代理】

- ・ リスクが誰に起因するかということと、その結果に対して誰が責任を負うかということは別の問題である。以前にも申し上げたが、何らかの被害が発生した場合に誰も責任を負う者がいないというライアビリティギャップが生じないようにすることが重要であり、リスクと責任の分配は別の問題であることを意識して整理してほしい。

【山本構成員】

- ・ 分野別評価の分野の区分で、パブリック・ガバナンスについては、税の徴収だけではなく、所得の再分配の問題を含めて社会保障全般をどのようにするのかという論点を入れた方がよい。
- ・ 各ユースケースの分析において、雇用がどうなるのか、増えるのか減るのか、言及した方がよい。また、社会の格差がどうなるのか、各論だけではなく社会全体としてどうなるのかという視点が必要である。

【クロサカ構成員】

- ・ 先行的評価について、既存の業務プロセスや業務の機能との整合という観点からの記述があるとよいのではないか。
- ・ A Iシステム相互間の連携前と連携後の2段階に分けているが、この間の過渡期的な段階で生じる問題というのもあるのではないか。例えば、過渡期的には、A Iネットワーク化がかなり進んでいる地域とあまり進んでいない地域、まだらな状況になることが考えられ、便益を享受できる者とできない者とが混在する可能性がある。

【近藤構成員】

- ・ 日本では、2035年には65歳以上の高齢者が34%になるという推計もある。ユースケースの中で介護にもっと注目するとA Iネットワークの可能性が大きく広がる。在宅介護、在宅ケアなどを盛り込んでほしい。

【中西構成員】

- ・ 分野別評価の分野の区分について、利用者視点ということで、B to C が強く意識されているようであるが、B to Bも重要である。第6次産業、シェアリングエコノミー、スマートファクトリー、フィンテック等を中分類に入れると、商業、産業のところがより具体的になる。

【林（秀）構成員】

- ・ 先行的評価において、ビッグデータの利活用を前提としているものが多数見受けられるが、データの性質に関する評価がリスクに関係する場合というのも考えられる。例えば、大量に集積することが独占につながり得るデータや代替不可能なデータは、そのデータの集積が競争に影響を及ぼす要素となる可能性がある。

【福井構成員】

- ・ 分野別評価の分野の区分について、例えば、” 趣味・娯楽” と” 教育・学び” とは重なる部分が多い。人間は一生にわたって何度も学び直していくもので、それ自体が大きな娯楽、生活や心を豊かにするものである。このように重なるところをうまく整理する必要がある。
- ・ 大屋分科会長代理の指摘にも関連するが、リスクの評価に当たっては、原因と結果、その結果に対する責任という3つの観点から考える必要があり、それぞれ主体が異なる場合もあり得ることなども踏まえて整理すべきである。

【江間構成員】

- ・ 様々なAIシステムの利活用の事例が示されているが、それがいつ頃のことを想定しているのか、時間、スパンがイメージできるとよい。
- ・ リスク・コミュニケーションについては、様々なアクターがいる中で、市民の意見やローカル・現場の知識など色々なものを考えて、あるいは、ニーズなども踏まえて、どのような技術を導入していけばよいのか、どのようなリスクがあるのか、ということを考える枠組みそのものをリスク・コミュニケーションでやっていくというのが昨今のリスク・コミュニケーションの考え方である。
- ・ 近藤構成員からの介護に関する御提案があったが、育児・子育ても入れた方がよい。また、教育では、生徒・児童が中心になっているが、生涯教育という観点も入れて検討すべきである。

【板倉構成員】

- ・ AIシステム、AIネットワーク自体が信頼を得られずに、総合的・総体的には被害・損害は減少するかもしれないが、その利活用が受容されないものをどのように考えるか。また、AIシステムを利活用する者と利活用しない者、あるいは、できない者との間のインタラクションの問題についての検討が必要である。

【渡辺構成員】

- ・ AIシステムを利活用する場合のインパクト、リスクは数多く記載されているが、AIシステムを利活用しないことに関する影響（特にリスク）が入っていない。単にインパクトが得られないということだけなのか、精査が必要ではないか。
- ・ ”利用者”といった場合、AIシステムの利用者なのか、AIシステムを利活用したサービスの利用者なのか。インパクトやリスクを評価する上では、もう少し広い範囲の者も対象とした方がよりよい評価ができるのではないか。

【稲葉構成員】

- ・ 全体的な基調が、定まった目標の実現に向けた最適化、その最適化に向けた人間の、あるいは、社会的な意思決定をAIが支援するという事になっているが、意思決定の支援というのは非常に難しい問題である。どのような段階であれば、人間の判断をAIが支援すると言えるのか、どのような段階になると、共同で意思決定することになるのか、さらに、AIに主導権が移るといのはどのような場合か、という問題がある。
- ・ 人工的に生成された詩や小説、音楽など既に現実的な形態として出てきている。価値実現の効率化、最適化にとどまらない新価値の創造という問題がある。自動生成される娯楽コンテンツが人間の在り方をどのように変えるのか、深刻な問題である。

【落合構成員】

- ・ クロサカ構成員からの御指摘にもあったが、AIシステムと人間の活動との混在は最初に訪れる段階であると考えられ、検討が必要である。また、AI開発ガイドラインに適合している良質のAIシステムと適合していない良質でないAIシステムとの混在ということも想定される。
- ・ 時間軸の問題で、AIシステムの普及が早い領域と時間がかかる領域があるものと考えられるが、普及が早い領域から優先的に検討を進めるのがよいのではないか。

【香月構成員】

- ・ 開発者やサービス提供者については、個人や小さなスタートアップ（ベンチャー企業）を含むものとして検討してほしい。個人や小さなスタートアップは、リスクや責任の分配を検討する上でも重要なステークホルダになる。

【板垣構成員】

- ・ 金融（融資）のユースケースについて、顧客の健康状態によって融資が変わり得るというような記載になっているが、健康でない者には融資しないということは利便性や顧客重視の観点からあり得ないことを踏まえた記述とすべきである。

(4) 「AIネットワーク社会推進フォーラム」(国際シンポジウム)の開催について

事務局より、資料4に基づき、3月13日・14日に、東京大学伊藤謝恩国際ホールにおいて、「AIネットワーク社会推進フォーラム」(国際シンポジウム)を開催する旨の報告があった。